

ムラージュをめぐつて

長門谷 洋 治

八十島信之助先生よりの教示によれば札幌医科大学には標本館があって、そこにはムラージュの展示もある由だがその説明（皮膚科学教室高橋誠氏による）の一部を引用させていただくとつぎのとおりである。

ムラージュとは食堂のウインド等に見られるものと同様のろう細工である。（札幌医大）標本館のものはさすがに腕の良い職人の手になるもので、保存にやや問題があったためか、色が少しくすんではいるが非常に生々しい病変が表現されている。展示されているムラージュの中には（略）きわめて稀な疾患である膿瘍性穿掘性毛嚢周囲炎、痘瘡様斑状皮膚萎縮症、稀な疾患としてダリエ病、尋常性狼瘡、汗孔角化症等がみられる。これらの疾患がスライドや図譜と異なり、色はもとより形態が立体でみられ、硬さを除くと全く本物と同じに正確に作られている（略）

ムラージュといっても現在の若い人には通じないかもしれないが、へ食堂のウインド等に見られるものといわれると、「あれのことか」とわかりやすい。またそのムラージュが標本館に保管されているのは意義の深いことである。

昭和六十二年五月ベルリンで行われた第一七回世界皮膚科学会に出席された本田光芳先生（日本医科大学教授）からは、同学会でギリシャの I. D. Stratigos 教授が配布された冊子 *Ausgewählte Moulagen aus dem Museum* を恵与した



図 2 伊藤 有



図 1 土肥 慶蔵

いたが、そこにはカラー三十枚のアネネ大学 A. Sygros の
病院に保管されているムラージュが紹介されていた。同ミ
ージウムには千六百六十個のムラージュがあるという。欧米
では日本以上にムラージュの保管に関心もたれているよう
である。

わが国の皮膚科にムラージュの技法を移入し、これを定着
させたのは土肥慶蔵（一八六六～一九三一、図一）である。
彼はその著『皮膚科学』（大正三年）に「日本皮膚科学史料」
を載せているが、その中につきの記述がある。

「蠟細工陳列室ニハ伊藤有製作スル所ノ皮膚病模型六百有
余ヲ蔵シ、此外巴里製ノモノ、ラッサール氏ノ寄附ニ係ル
モノ、高野椋一製作ニ係ルモノ各若干アリ。伊藤ハ陳列室
ノ傍ニ細工部屋ヲ有シテ専心製作ニ従事セリ」

ここに伊藤有（図二）という人物がでてくる。土肥と同じ
福井県人だとのことなので岩治勇一先生にお尋ねしたところ、
つぎの教示を得た（『武生市医師会誌』による）

「伊藤有（一八六四～一九三四）は武生町浪花区伊藤佐七
の長男として生まる。明治十八年に上京して亀井至に洋画を

学び、二十一年北海道庁に赴任して、水産調査部の絵画を担当。二十七年、土肥慶蔵に随つて欧州を訪い、ウイン大学のヘンニングから蠟製標本製作の伝習を受けた。帰朝後土肥博士より皮膚病の蠟製標本の改良を委嘱せられ、刻苦精勵によりその技術精巧を極め、その特色は大きさ・形・色調ともに全く自然の通りである。東京大学で所蔵せらるるもののみでも一千五百個を越え、土肥博士在職二十五年記念として、その知人及び門下生により皮膚病蠟製標本陳列館が建造された」

今は忘れ去られたムラージュであるが、土肥はわが国の皮膚科にその技法を導入するとともに、その製作に力を入れ、専門の技術者を育成した。土肥は自らが欧州に留学して皮膚科学を学ぶ過程で、ムラージュのもつ意味と製作の現場を知り、わが国においてもその製作の必要なことを感じとつたのであろう。近代の皮膚科学は明治初期に來日した外人や他科専攻の日本人などにより、すでに土肥以前に講じられてはいたが、いわば西洋の皮膚科学の翻訳・紹介であり、未だその病名の日本語も不確定なものが多かつた。そして日本にそんなに多くの種類の皮膚疾患があるのかといふかる向きもあつた。そのような中であつて土肥の目標は《日本人の皮膚疾患の記載と日本の皮膚科学の確立》にあつた。土肥は晩年（昭和四年、『皮膚科学』十三版序）つぎのように述べている。

「往年、予ノ海外留学ヨリ歸リテ、始メテクリニツクニ従事スルヤ、朝夕病者ニ接シテ、風土氣候食飲習俗ノ民族病理学ニ影響スルモノ意外ニ深ク、泰西学者ノ説ヲ採ツテ、直チニ我ガ準繩規矩ト為シ難キヲ悟リ、私カニ本邦学徒ノ為ニ『皮膚科学』纂述ノ志アリ」

土肥が東大教授になつたのが明治三十一年、そして『皮膚科学』の初版出版が四十三年である。ちなみにそれまでの《皮膚病学》を《皮膚科学》と改称したのも彼である。また彼は本書出版の前にお一つ重要な著作を出している。『日本皮膚病徹毒図譜』の刊行がそれで第一帙の出版が明治三十六年で、全十帙の完結は四十三年、『皮膚科学 上巻』上梓と

同年に七年ぶりに完結したことになる（拙稿「土肥慶蔵『日本皮膚病微毒図譜』刊行の意義」『日本医史学雑誌』三三巻一號、一〇七頁、昭和六十二年参照）。この図譜は日本人症例による皮膚疾患アトラスの最初であるが、その描写をしたのもまた伊藤であった。本図譜は完成度の高い優れたもので、国際的に通用する高水準のものであるが、当初はそのポイントを描写者につかませるのに苦労したようで、土肥はのちにつきぎのように述べている。

「石版画工未ダ皮膚病ノ何タルカラ解セザルヨリ、臨模写生動モスレバ真ヲ失シ、為ニ修正改竄其幾回ナルヲ知ラズ。苦心実ニ想像ニ出デタリ」

これと同様のことはムラージュ製作の初期においても生じたと思われる。しかし洋画を学び、北海道庁で水産調査部の絵画を担当したこともある伊藤が、土肥の意図を理解し、努力することにより、その技術は急速に向上したようで、わが国皮膚科ムラージュ製作の開祖となった（図3）。前述の『武生市医師会誌』では彼を「資性温厚篤実、金錢に潔白、粗衣粗食に甘んじ、三十余年間にわたり土肥慶蔵の下にあって、黙々として皮膚病の蠟製標本の製作に専念し、その第一人者といわれた」と記している。



図3 ムラージュの1例（白色ぶどう状菌性膿痂疹，東京帝国大学医学部皮膚科所蔵，製作者，伊藤有）（東大皮膚科提供）

土肥は大正十五年、東大を退くが、昭和二年当時、伊藤は依然東大にあって、ムラージュ製作に従事していることは、同年の『日本医事新報』に蠟製模型についての質問への回答によって明らかである（二五一号、二五頁）。

「皮膚科に関する権威ある蠟製模型製作者は東京帝国大学医学部の皮膚科教室内、伊藤有氏であります」

寺畑喜朔先生より『医海時報』四六二号（明治三十六年四月十八日号）に登載されている「日本皮膚科学会第三回總會記事」（二七三頁）の惠受を受けた。これからもわかるように日本皮膚科学会の発足したのは明治三十四年である。記事にいう。

「今回は（本郷中央会堂）階下の左室を以て和漢洋古今の成書、蠟製模型ならびに図譜・写真等の陳列室とせり。まず左側机上に富士川（游）氏出品の和漢の斯学に関する成書を網羅して無慮数百冊を整然陳列し（略）右側机上には一方に医科大学皮膚科教室に於て撮影せる諸種皮膚病、梅毒、癩病写真帖および十数冊（略）右側上方壁間には本邦製及び外国製の蠟製模型標本数十種、下方には本邦における諸種皮膚病および梅毒の図譜を数十種二列に掲げたり」

ここに本邦製および外国製の蠟製模型標本数十種とあるのはいささかオーバーであるにしてもすでにこのころ、伊藤らの製作によるムラージュはかなりの数に達していたであろう。また外国製というのは、土肥が前述しているようにパリ製、ラッサール Lassar 寄附のものを留学より帰国のさいに持ち帰ったものであろう。附言すればこの学会ではへ稀有なる患者デモンストラチオンやへ幻燈を用い各種の皮膚病、下疳、梅毒疹七十余种に就て土肥博士一々詳細なる説明を試みとあり、宿題報告も行なっているのは今日の学会形式と大きな差がない。ただ最近ではブライバシーを尊重して患者デモはほとんど行われなくなった。

なお『武生市医師会誌』に伊藤が「東京博覧会・日英博覧会・独逸ドレスデン万国博覧会等に出品して、毎に名誉賞牌を受けた」とあるが、寺畑先生教示の資料（『医海時報』六八二号、明治四十年七月十三日号、七頁）によれば、当時開催中であった東京勸業博覧会において伊藤は『後藤節蔵出品蠟製模型』で協賛賞を得ている。後藤は手術器械なども出陳しており、医療器具店の経営者だったように思われるが、会の性質上伊藤の名を直接表面に出すことは遠慮して後藤の出陳という形をとったものと推測される。その後藤が、『皮膚病梅毒蠟製模型』で最高の賞、名誉金牌を受けている。その受賞理由は以下である。

「多年皮膚病黴毒蠟製模型の製作に考案を凝らし、製品の形態色彩はほとんど真に迫り、かつ全く褪色の眞なきは迥に欧州製品を凌駕す。學術の進歩に益する所まことに著大なり。其功賞すべし」

ところでムラージュの製法はどうするのか。小生はこれに関する知識はまったくない。私信を引用させていただく失礼をお詫びして、八十島先生の文をお借りすれば、

「中学生のころ、友人がムラージュの技術を聞いてきて、リンゴやバナナの標本をなかなか上手に作るのを見たことがあります。石膏泥を準備し、塗りつけて凝固したら外し、球形のような立体でしたら鋸断しなければなりません。できた雌形の内面に軽く油をしき、溶かしたパラフィンを注げば形はできる、それに油絵具で彩色してしました。困難は形を作るのよりは、彩色にあったようです。それから石膏が固まる時には、熱傷を受けるほどではないにしても発熱するので、患者に不快感を与えることは当然。昔の帝国大学の学用患者でないと難しかったかも知れません」とあった。

また筆者がある皮膚科の大先輩に「かつてムラージュを作っていた人は（その職場を失って）どこに行ったのでしよう」と尋ねたとき「就職先の一として科学警察研究所などもあった」とおききした。八十島先生によれば「北海道の警察では、雪の上の足跡などには特別なことをやっていたようであるが、一般の犯罪捜査の足跡痕の採取は、石膏泥を流しこむだけの簡単なものです」とのことである。なお文初にあった（食堂のウインド等）にみられるのは今日では多分プラスチック製であろう。現在でも看護学校の解剖模型などはプラスチックで作られ、実用されている。ロンドンでは今日でも等身大の精巧な蠟人形を配置して入場料をとるマダム・タッソーの蠟人形館などがある。

以下も八十島先生の私信の一部である。

「戦争前の学生時代、東大の学内開放があり本郷に出かけたことがあります。その時土肥氏のムラージュ・コレクション

ンを満たした標本館を見て感心した記憶があります。それより前の中学生のころへ有田ドラッグの標本を恐る恐る勇氣を揮って覗きに入ったこともありました。

私が講義を聞いた当時の慶応の皮膚科の先生は横山砧教授でしたが、試験の時に学生の数だけのムラージュを出しておき、一人に一つを与えて、それについて試問されるのでした。私達は前夜皮膚科の若い先生から、教授から命じられて準備するムラージュを聞き出すのに苦心したものでした」

筆者はわが国における皮膚疾患ムラージュの現状を知るために昭和六十一年十月にアンケート調査を行った。この詳細については別に報告する予定であるが、ここではその一部を紹介したい。調査はほぼ戦前に創始された二十八の皮膚科教室に郵送で依頼した。その国・公・私立別の数と、ムラージュが現在も保管されているとした大学の数を記すれば以下である。国立一三中一一、公立二中二、私立一三中四、計二八中一七。すなわち国・公立の保管の率が高い。国立でなしとしたのは東北大と大阪大であるがともにかつては保有していた。大阪大では病院新築のとき大学紛争中だったため、どさくさに紛れて処分されたという。私学で一時期まで保管されていたが現在はないというのが慈恵医大と順天堂大学である。保管しているとした大学とその個数を記すれば以下である。

国立 北海道（約二〇〇）、千葉（八〇〇）、東京（四九〇）、新潟（約八〇〇）、金沢（二一九）、名古屋（二〇〇）、京都（五〇〇）、岡山（九）、九州（五〇）、長崎（記載なし）、熊本（六三）

公立 札幌（五〇）、京都府立（六）

私立 慶応（一〇〇以上）、東京医科（約一五）、東京女子（八五）、昭和（一五）

このうち「十分注意して保管されており、良い状況にある」とするのが北海道、東京、金沢、名古屋、京都、札幌、東京女子の七である。製作年代について記載のあったのは九大学であるが、このうち一番古いのが明治三十五年からの東京

で、大正年代からとするのが千葉、九州、熊本である。新しいのは札幌で昭和二十五年からである。製作中止の年は東京女子の昭和十五年が早い方で、遅い方では名古屋の昭和四十一年頃までで、三十年前後までその製作が行われていたところが多い。

製作者名は併任も含めて判明しているのが以下である。北海道（南條謙雄）、千葉（安西準）、東京（伊藤有、永安周一）、金沢（伊藤有―一部―）、名古屋（長谷川兼太郎）、九州（新島伊三郎、石松幹、沼沢渡、里永寿）、長崎（高比良隆治？）、熊本（町田信治―一部―）、札幌（南條謙雄）、慶応（宇野一洋）、東京医科（伊藤有）、東京女子（伊藤有、宇野一洋）この中に伊藤有の名が何度か出てくるが、東大から赴任した教授がそのさいにムラージュを持参したというケースもあると思われる。

資料館・標本館などに保管されているのは東京、金沢、京都、熊本、札幌の各大学である。東京女子では講堂前廊下に常設展示（一部）をしている（後述）。

ムラージュを現在も教育に活用しているのは名古屋、札幌、京都府立、慶応、東京女子で、京都は活用することあるも非常に少ないとする。

現在はカラー写真で対応できるが、ムラージュにはカラー写真と異なった意義をもっているのが一七の総回答の中一四に達し、ムラージュに今日的意義はないとするのは僅か三に過ぎなかった。

なお熊本大学の荒尾龍喜教授よりは、同学の皮膚科泌尿器科教室は大正十二年九月、三宅勇教授によって創始され、以後ムラージュの製作が行われたが、昭和十年元日の火災、同二十年七月の戦災にあった。しかし山崎記念図書館閲覧室内に保管されていたもののみが焼失を免れた。昭和三十年ころ木製のムラージュ保管箱が白蟻の被害にあらうなどして、ムラージュにも若干の損傷を受けたが、同三十六年皮膚科泌尿器科の講座分離のとき保管箱を新調、現在は医学部内肥後医育記念館に保管。六十三点中三十点には町田信治（長崎市）作製の記録があり、古いものが昭和十三年四月、新しいものが

同十八年（月不明）となっている由である。

東京女子医大の肥田野信教授からは、教授が『（東女医大）大学ニュース』二二六号（昭和五十一年四月）に寄稿された「皮膚科のムラージュ」をいただいた。これによればバリのキピタル・サンルイにはミゼ・ド・ムラージュがあり、そこにはブロック、ダリエ以来の数千個を下らない標本が整然と並べられているという。教授は東女医大に残っていたムラージュを整理しなおし、臨床講堂脇に陳列しそこにつきぎのようなパネルを掲げられた（原文横書）。

皮膚疾患ムラージュ標本

—加藤・田村コレクション—

昭和二年本学皮膚科泌尿器科学教室が開講されており、加藤泰教授は学生教育用にムラージュ（蠟型）標本を盛んに作製せしめ、田村一教授がこれを引継いで、昭和十五年迄に八五個のムラージュが完成され、今日まで保存されている。これらムラージュは当時第一流の技術者であった伊藤有氏らにより製作されたもので、今日もはや見る機会のない疾患も少なからず、歴史的にも貴重な資料である。ここにその代表的な標本を示し学習の参考に供するものである。

昭和五十年十月

東京女子医科大学皮膚科学教室

稿を終えるにあたりアンケート調査にご協力いただいた各大学皮膚科教室の関係者にお礼を申し上げますとともに、ご指導・ご教示をいただいた八十島信之助、岩治勇一、寺畑喜朔の各先生に謝意を表します。

（大阪府豊中市）

On the use of Moulages in Japan

by Yoji NAGATOYA

In the medical field, moulages were made in order to reproduce faithfully, in three dimensional form, impressions of the diseased areas, especially in the dermatology departments of Europe. In the Meiji era, Keizo Dohi, who had studied in Vienna, introduced the technique into our country and the making of moulages was entrusted mainly to Yu Ito. Quite a number of his works are still kept in Tokyo University. Most of the Departments of Dermatology which started before the Second World War had full-time technicians for making moulages.

Seventeen Japanese universities have kept one or more moulages made at that time in some form or other. Though moulages have been superseded by colour photographs, nonetheless it is desirable to preserve some original moulages because they provide accurate impressions of various afflictions no longer prevalent.